

思考力・判断力・表現力を育成する小学校社会科学習の在り方

～ 段階的問題解決的な学習を取り入れた授業実践を通して～

(1年次)

小学校社会科において、思考力・判断力・表現力の育成を目指すために、問題解決的な学習に取り組む必要があることが平成20年度改訂の学習指導要領にも示されている。

そこで、本研究では、1年次の取組として、学年の発達段階に応じた問題解決的な学習を設定した。学習過程は「気付く・調べる・調べる・まとめる」とし、調べ方、考え方、学び方について学び合うための学習形態を取り入れた授業実践を行い、思考力・判断力・表現力の育成を図った。併せて、客観性、妥当性の信頼度の高いパフォーマンス評価による思考力・判断力・表現力の評価を試みた。

その結果、子どもは問題解決的な学習に意欲的に取り組むとともに、表面的な知識の習得ではなく、知識を比較、関連付け、総合して思考することや社会的概念を自分の言葉で表現する力を形成することが分かった。

研究会委員

尾張旭市立城山小学校教諭

坪井 隆博（平成23年度）

津島市立北小学校教諭

井戸田 竜郎（平成23年度）

知立市立知立東小学校教諭

杉浦 卓次（平成23年度）

総合教育センター研究指導主事

佐々木佐知子（平成23年度主務者）

1 はじめに

平成 20 年改訂の学習指導要領においては、「生きる力」を育むために基礎的・基本的な知識及び技能を着実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成することが求められるようになった。小学校社会科においては、社会的な思考力や判断力の育成に関して配慮すべき事項として、公正に判断する能力と態度を養うこと、社会的な見方や考え方を成長させることをより一層重視する方向で改善が図られている。つまり、子どもが自分で調べたことを基にしながら、社会との関わりの中での人々の生活についての特色やつながりなどを、様々な視点から考えられるようにすることが重要であると考ええる。

2 社会科学習における子どもと教師の実態

(1) 「基礎・基本となる知識・概念」と「問題解決的な学習」について

国立教育政策研究所教育課程研究センターは、平成 19 年度に基礎的・基本的となる知識・概念と問題解決的な学習に焦点を当てて「特定の課題に関する調査（社会）」を実施した。その調査結果のポイントは、以下のとおりである。

《基礎・基本となる知識・概念》

- ・ 47 都道府県の名称と位置の正答率は約 55%
- ・ 47 都道府県をまとめて覚える、白地図を使って学習した子どもの正答率が高い傾向
- ・ 歴史上の人物と業績の正答率は約 70%
- ・ 日本国憲法の三原則の正答率は 85%以上

《問題解決的な学習》

- ・ 多様な資料の中から問題を発見・把握する力が不十分
- ・ 課題の解決策を表現したり、その理由を説明したりすることが不十分

「分析結果から見た主な課題と指導上の改善」事項として、

《基礎・基本となる知識・概念》

- ・ 地図帳の継続的な使用、白地図作業など多様な学習活動の工夫
- ・ 人物年表や人物事典作りや、歴史的事象と結び付けた、人物理解を深める指導の工夫

《問題解決的な学習》

- ・ 資料を読み取り、関係付ける活動を通して、子どもの問題意識を醸成させる指導の工夫
- ・ 調べた事実を基に考え、表現する学習機会の充実

が挙げられている。知識を習得させるだけでなく、思考力・判断力・表現力等の育成を目指した学習の必要性が求められていることが分かる。

(2) 社会科学習に対する意識調査

ベネッセ教育研究開発センターの平成 18 年実施の「第 4 回学習基本調査」(小学生 2,726 名)では、小学校の「好きな教科」において、社会科の「とても好き」「まあ好き」を合わせた割合は、48.0%と全教科中で最下位であった。

さらに、社会科学習に対する実態を探るため、平成 23 年 6 月、愛知県下の小学校の子ども（5 年 922 名・6 年 1,000 名 計 1,922 名）と社会科を担当している教師（106 名）への意識調査を実施した。

ア 子どもの意識

図1 社会科学習に対する子どもへの意識調査の結果から(愛知県内の子ども N=1,922)

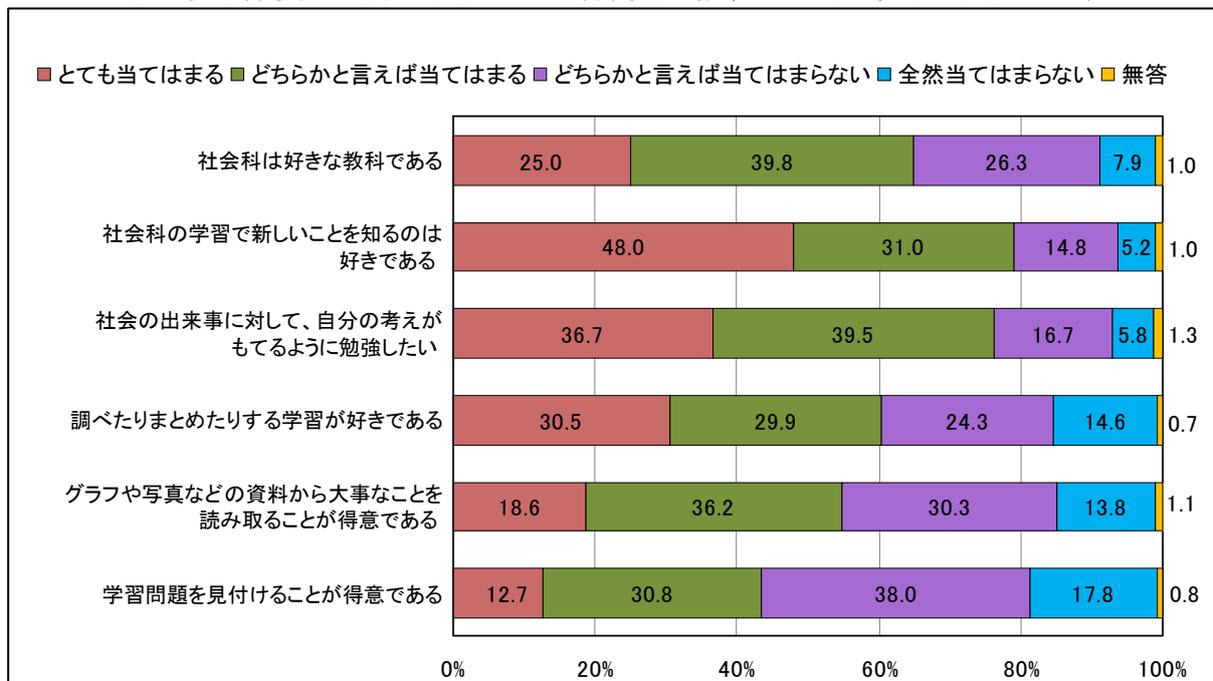


図2 学年別の社会科が好きな子どもの割合(愛知県内の子ども)

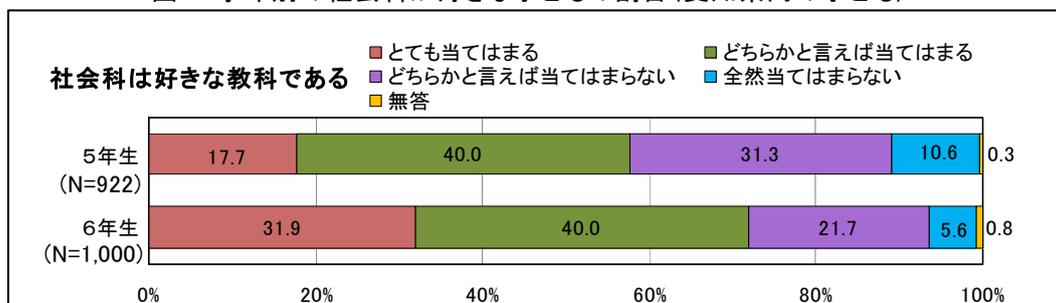


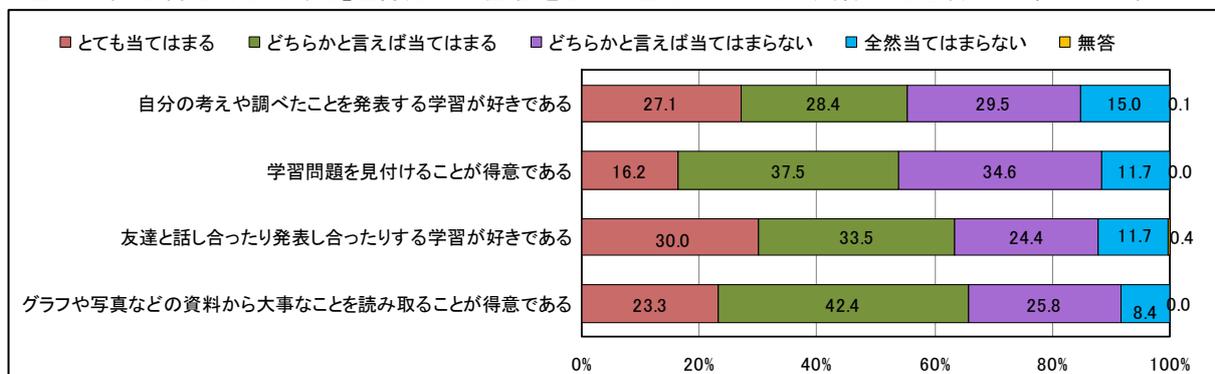
図1の子どもへの意識調査から、社会科が好きな教科である子どもは、64.8%、新しい社会的事象について知るの好き(79.0%)で、社会の出来事に対して、自分の考えがもてるように勉強したい(76.2%)という傾向にある。特に、「新しい社会的事象について知るの好き」については、図2「学年別の社会科が好きな子ども」において、6年生の肯定的な回答(71.9%)が多いという結果からも実証される。調査実施時期から考え、6年生の「歴史学習」を新しい事象として認識していることが理由として考えられる。

しかし、調べたりまとめたりする学習や資料を読み取る学習に対して、肯定的とはいえない。学習問題を見付けることに対しても否定的な回答が多い。

さらに、「社会科が好きである」と肯定的な回答をした子ども(1,256名)について、具体的に意識の分析をすると、図3のような結果を得た。社会科は好きでも、学習問題の設定が苦手、話合いや発表は好きでない、資料の読み取りが苦手という子どもが3割から4割以上である。

すなわち、子どもは、新しく出会う社会的事象について、興味・関心をもち、社会の出来事にも主体的に関わり、自分の考えをもてるようにしたいと考えているが、具体的に自分の問題を見付け、追究し、解決する力は十分ではない。このことから、問題解決的な学習を積極的に取り入れた授業づくりが必要である。

図3 「社会科は好きである」と肯定的な回答をした子どもについての具体的な意識の内容 (N=1,256)



イ 教師の意識

教師の社会科学習に対する意識については、「社会科を楽しく指導できる」という教師が67.0%いる(図4)。

図4 社会科学習に対する教師への意識調査の結果から(愛知県内の教員 N=106)

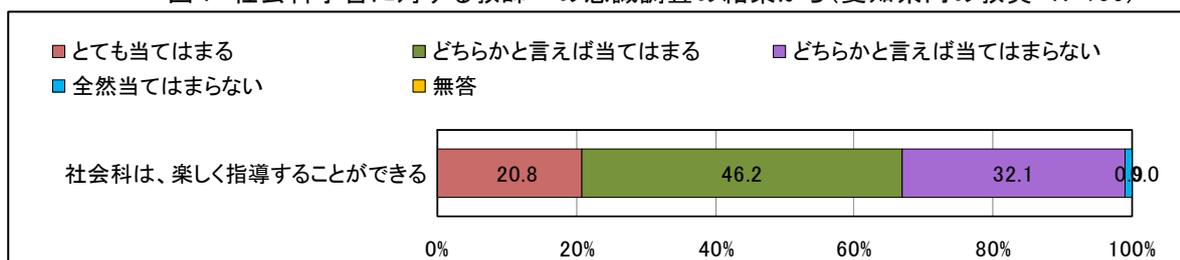


図5 社会科学習に対する教師への意識調査の結果から(愛知県内の教員 N=106)

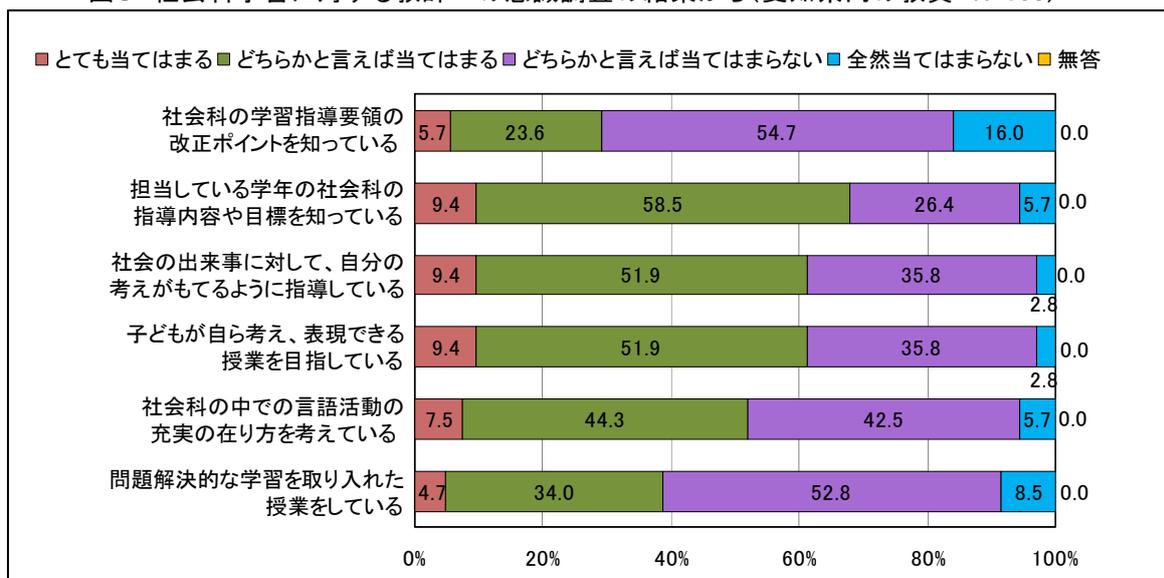


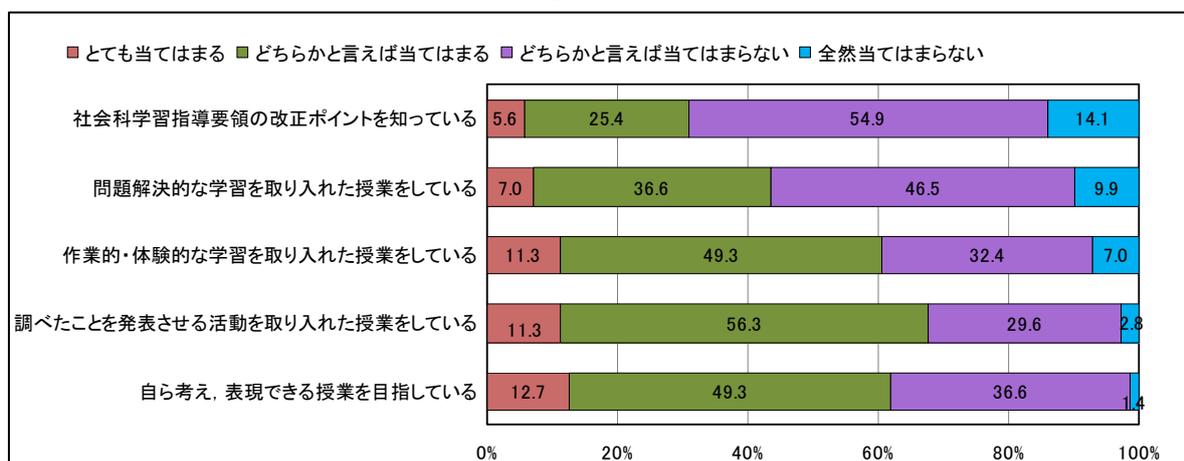
図5の「社会科の学習指導要領の改正ポイントを知っている」については29.3%にとどまっており、この結果から、教師は、新学習指導要領の改正ポイントをしっかりと認識し

ているとは言い難い。しかし、言語活動の充実を図りながら思考力・判断力・表現力等を目指した学習指導が求められていることについては、半数以上の教師は意識している。

ここでは、社会科の学習指導要領の改正ポイントの一つである「問題解決的な学習を取り入れた授業をしている」教師（38.7%）と、「子どもが自ら考え、表現できる授業を目指している」教師（61.3%）に着目した。多くの教師は、子どもが主体的に考え、表現できる授業を目指しているが、その学習活動である問題解決的な学習を十分に取り入れられていないのが現状である。これは、子どもへの調査（図1）「学習問題を見付けることが得意である」が43.8%とやや少ないことから、問題解決的な学習の取組が十分でないことが考えられる。

さらに、「社会科は、楽しく指導することができる」と肯定的に回答した教師（71名）の具体的な意識を見ても、学習指導要領の改正ポイントを知らない、問題解決的な学習や作業的・体験的な学習、発表する活動を取り入れていない、自ら考え、表現できる授業を目指していない教師が目立っている（図6）。

図6 「社会科は、楽しく指導することができる」と回答した教師の具体的な意識の内容（N=71）



以上のことから、問題解決的な学習の取組を推進し、思考力・判断力・表現力を育む必要があることが分かる。

3 社会科学習で育成したい力

(1) 学習指導要領の改訂で求められている社会科学習の在り方

学習指導要領の改訂の背景には、社会情勢の変化及び児童生徒の国際調査の結果がある。特に、児童生徒の思考力・判断力・表現力等に課題があったことから、中央教育審議会の答申を踏まえ、社会科の授業では、作業的、体験的な学習や問題解決的な学習を一層充実させることや、言語活動の充実を図る必要がある。

ア 「目標」の改善から見える育成したい力

思考力・表現力の育成を目指して、理解・態度・能力のうち、各学年の能力に関する目標について、これまでの「調べたこと」に「考えたこと」を加え、「考えたことを表現する」能力を一層重視している。

イ 「内容」の改善から見える育成したい力

内容の一部が改善され、新たな内容が加えられた。その中で、例えば、3年「店で働く人々の仕事」における「販売」については、「販売者側の工夫を消費者側の工夫と関連付け

て行うこと」，5年「情報化社会と私たち」における我が国の情報産業などの様子と国民生活との関連に関する内容については、「情報化した社会の様子と生活のかかわり」となるなどの改善があった。つまり，社会的事象を一面的ではなく，多面的，総合的にとらえる力や社会的事象を比較・関連付け（つなげる）・総合（まとめる）して見たり考えたりする力を育てることが求められている。

ウ 社会科における言語活動

小学校学習指導要領解説社会編（平成 20 年 8 月）では，社会科における言語活動について，「観察・調査や資料活用を通して必要な情報を入手し的確に記録する学習，それらを比較・関連付け・総合しながら再構成する学習，考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めていく学習など」と具体的な学習活動を示している。すなわち，調べたことを読み取り，自分なりに解釈して自分の言葉でまとめ，それをみんなで共有することによって，自分の考えを深められるような学習活動が求められているのである。「自分の言葉でまとめる」活動を充実させ，読み取り，解釈，説明，論述の力を育てることが大切である。

(2) 必要な力を育成するための活動

社会科学習において，思考力・判断力・表現力や多面的にとらえる力を育成するには，思考活動と表現活動を取り入れた授業を展開する必要がある。そのため，学習指導要領でも，問題解決的な学習の実践が求められている。

ア 思考活動

学習指導要領の各学年の目標における能力に関する目標に，「考える力」と表記された各学年で育むべき能力が，以下のように系統的，段階的に示されている。

学年	思考力・判断力
第3学年及び第4学年	地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力
第5学年	社会的事象の意味について考える力
第6学年	社会的事象の意味をより広い視野から考える力

ここで「考える力」と表記されている内容は，思考力・判断力と考えられ，内容の取扱いでは，社会的事象を多面的，総合的にとらえ公正に判断するように配慮事項としている。「社会的事象の意味について考える力」を育成するためには，学習問題に沿って調べたことから，「どのようなことが言えるのか」を自分なりに思考する活動が必要である。そのために，調べたことを文や図に表し，分類したり，つながりを見いだしたりしながら考え，具体を一般化する帰納的な思考を育成する活動を工夫したい。さらに，高学年では，理解したことを基にして，それらを具体化する演繹的な思考もできるようにしたい。

イ 表現活動

思考は，言語を操作して行われる。頭の中で思考したことを他者に分かるように伝えるために，その内容を組み立て直し，順序やつながりを確かめながら，話したり書いたりしなければならない。

さらに，自分の考えを表現し合ったり他者に伝え合ったりすることで，他者の考えを知り，自分の考えを振り返って客観的に認識することができる。考えを伝え合い，他者の考えと自分の考えを比較し，関連付けて考え，再度自分の考えを見直すことで，多面的に思

考する力につながる。つまり、自分の考えを図や文で表現して交流活動を行い、自分の考えを再構成することによって表現力を高めていくことができるのである。

これらの思考活動と表現活動を問題解決的な学習の過程に位置付けることにより、社会科学学習を充実させ、思考力・判断力・表現力を育成することができるものとする。

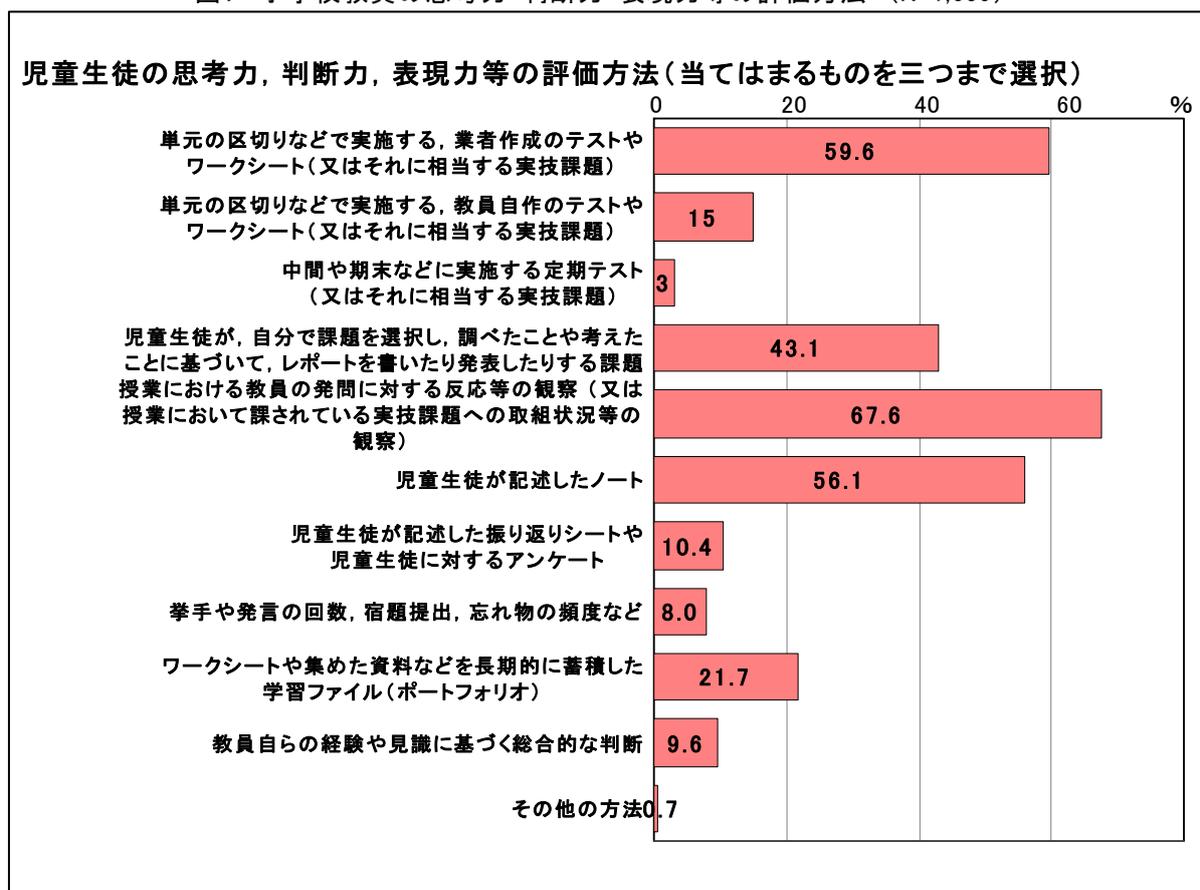
4 思考力・判断力・表現力の評価

思考力・判断力・表現力について、育成の状況を分析するためには評価が必要である。思考力・判断力・表現力における評価の方法や実施状況の現状について、データから読み取ることができる。

平成 21 年 8 月に行われた文部科学省委託調査「学習指導と学習評価に対する意識調査」の報告書から、小学校教員（回答者数 1,659 名）の思考力・判断力・表現力等の評価に対する意識を見ると、以下のことが言える。

図 7 の「児童生徒の思考力、判断力、表現力等の評価方法」では、多くの教員が、「授業における発問に対する反応等の観察」「業者テスト・ワークシート」「児童生徒が記述したノート」「児童生徒が自分で課題を選択し、調べたことや考えたことに基づいて、レポートを書いたり発表したりする課題」をその手段としている。しかし、これらの評価方法は、客観性・信頼性が十分であるとは言えない。

図 7 小学校教員の思考力・判断力・表現力等の評価方法 (N=1,659)



また、観点別学習状況の「評価を円滑に実施できているか」について集計したのが、図 8 である。「知識・理解」「技能・表現」の観点では、90%以上の教員が肯定的にとらえている一方、「思考・判断」の観点は、円滑に実施できていると思わないと回答の割合が高い。

その観点「思考・判断」の評価について、教科間で比較したのが、**図9**である。社会は「社会的な思考・判断」、算数は「数学的な考え方」、理科は「科学的な思考」、生活は「活動や体験についての思考・表現」である。肯定的にとらえている回答は、他教科に比べ、社会の割合が低い。社会科の思考力・判断力・表現力の評価は難しいととらえている教員が多い。

実際、**図10**の愛知県内の調査においても、「思考力・判断力・表現力の評価が難しい」と回答した教員が82.1%であった。評価が難しいと感じる要因は、何を（内容面）、どのように（方法面）評価すればよいのかが明確でないからであると考えられる。

図8 意識調査による評価の実施状況①(評価を円滑に実施できているか)

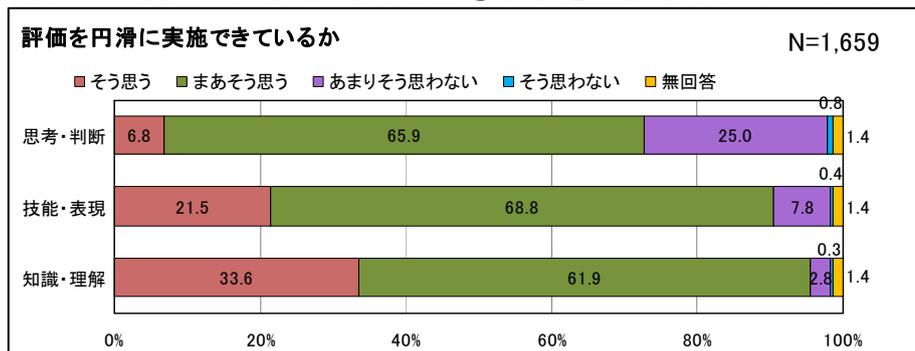


図9 意識調査による実施状況②(「思考・判断」の評価を円滑に実施できているか)

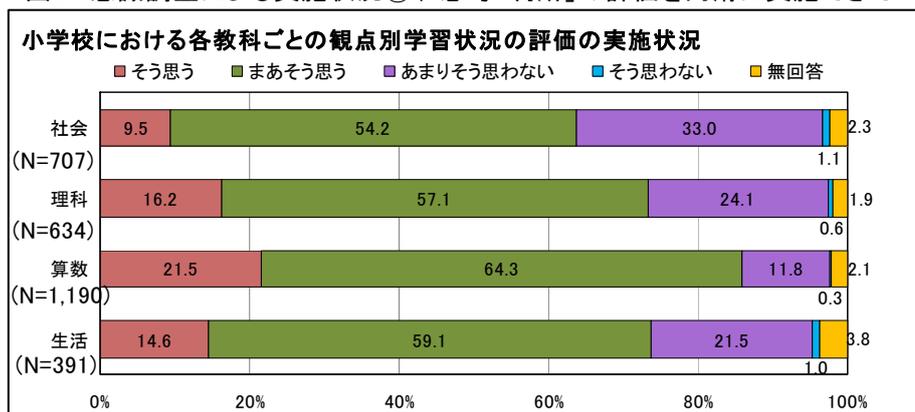
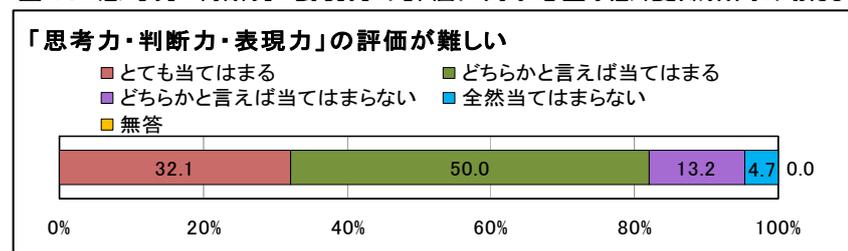


図10 思考力・判断力・表現力の評価に対する困り感(愛知県内の教員 N=106)

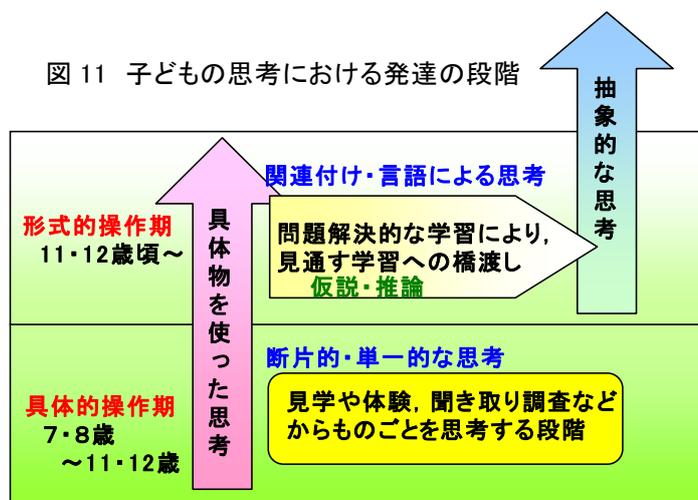


5 思考における発達段階

子どもの思考の発達は、3・4年生での具体的思考から6年生頃の抽象的思考へと変容していく。発達心理学者のピアジェの思考発達段階説では、7～11歳頃を断片的で体系のない生活体験を礎に思考する具体的操作期とし、12歳以降を蓄積、体系化された知識や記憶を基に論理的な思考ができる形式的操作期としている。

具体的操作期の段階では、観察や見学を通して得た体験を基にする具体的な思考が主流である。形式的操作期の段階では、今までの体験、経験、既存の知識を礎にして、新しい社会的事象について、具体的な活動がなくても見通す力ができ、各種の資料や友達との話

図11 子どもの思考における発達段階



合いを通して、情報を交換してものを考えるという抽象的な思考ができるようになるのである。したがって、具体的な思考から抽象的な思考への橋渡しをするための問題解決的な学習の在り方も考える必要があるため、学年の発達段階を考慮して、学習過程の在り方を探っていく。

6 研究の目標

(1) 研究の構想

図 12 研究構想図



子どもが社会的事象に出会い、楽しいと感じながら自分の考えをもち、表現できる社会科授業への改善が必要であると考えられる。そこで、図 12 の研究構想図のように、子どもが自ら学習問題を見付け、考え、表現するという問題解決的な学習の在り方について、子どもの思考における発達段階も考慮して探っていきたい。また、教師が難しいとしている観点別学習状況の「思考・判断・表現」の評価についても、問題解決的な学習を実践していく中で、実証的に研究していく。

(2) 目指す子ども像

「社会的事象に主体的に関わり、自ら考え、判断し、表現できる子」

《3・4年生》 学習問題を選択して、体験を通して調べ、問題の答えとして考えを短い文で書き表すことができる子

《5年生》 学習問題を把握して、体験や調べたことから分かったことを伝え合い、考えを論述することができる子

《6年生》 学習問題を設定し、調べたことから分かったことや考えたことを伝え合い、その考えを再構成させて論述できる子

(3) 研究の仮説

社会科の一単元の学習において、学年の発達段階を踏まえた4段階の学習過程の問題解決的な学習を取り入れた授業を展開すれば、子どもは主体的に学習に取り組み、社会的事象についての思考力、判断力、表現力を高めることができるであろう。

7 研究の計画

(1) 1年次（平成23年度）の研究

基本的な問題解決的な学習の流れの構築を図る。問題解決的な学習を初めて導入する3人の研究員が各1実践を実施し、各学年に応じた問題解決的な学習の在り方を探る。

また、観点「思考・判断・表現」の評価方法と判定についても考察する。

(2) 2年次（平成24年度）の研究予定

1年次の実践を踏まえ、発達段階に応じた問題解決的な学習の流れの確立を図る。子どもの発達段階を踏まえ、学年に応じて以下のような学習段階を設定し、実践する。

学年	学習の段階
3・4年	基本的な問題解決的な学習の仕方の導入段階
5年	問題解決的な学習に慣れる段階
6年	問題解決的な学習を習熟する段階

8 1年次における研究の方法

(1) 具体的な手だて

《手だて①》 4段階の学習過程の設定と思考活動・表現活動の位置付け

基本的な問題解決的な学習における4段階の学習過程を設定し、学習形態を工夫した思考活動と表現活動を位置付け、思考力・判断力・表現力の育成を図る（表1）。

《手だて②》 問題解決のためのワークシートの工夫

問題解決に向かわせるためのワークシートを使用し、学級全体での考えの交流後、根拠を基に自分の言葉で考えを再構成させ、表現させる。

表1 4段階の学習過程と思考活動・表現活動の位置付け

気付く(問題設定)段階 【一斉学習】	・事象との出会い (学習問題がもてるように効果的に出会わせる) 《中学年》教師の用意した学習問題 (学習問題の設定の理由を明確にする) 《高学年》単元を通しての学習問題の設定 (資料による根拠を基にして設定させる)	思考活動
調べるⅠ(問題追究)段階 【個別又はグループ学習】	・資料収集, 資料選択, まとめ (図表への整理, 共通点と相違点への着眼, 観点の設定による分類)【個人】 ・友達と追究する【グループ】	
調べるⅡ(問題追究)段階 《交流》 【グループ又は一斉学習】	・調べたことを発表し, 考えを伝え合う (共通点と相違点を明確にした交流, 双方向の立場による交流)【グループ・全体での共有化】	表現活動
まとめる(問題解決)段階 【個別・一斉学習】	・自分の考えの再構成 《中学年》・考えを比較して文章化する 《高学年》・社会的事象における問題について概念化をする ・新しい考えを見いだす	

(2) 検証方法

ア 検証授業

3学年で検証授業を行い、子どもの意識調査とワークシートの記述内容から4段階の学習過程による問題解決的な学習における思考活動と表現活動の有効性を検証する。

子どもの意識調査は、各学習段階（気付く・調べるⅠ・調べるⅡ・まとめる）の満足度を単元終了後に行う。また、ワークシートの記述内容は、使用した各学習段階（気付く・調べるⅠ・調べるⅡ・まとめる）のワークシートにおいて、達成度から判定する。

- ① 3年 単元名「商店のしごと」 知立市立知立東小学校
- ② 5年 単元名「自動車工業のさかんな地域」 津島市立北小学校
- ③ 6年 単元名「明治の国づくりを進めた人々」 尾張旭市立城山小学校

イ 思考力・判断力・表現力の評価の判定方法

思考力・判断力・表現力の評価には、結果の判定に客観性、妥当性の信頼度が高いパフォーマンス評価が適していると考えられる。パフォーマンス評価とは、ルーブリックで達成度を判定する評価方法である。また、ルーブリックとは、達成の度合いを示す2～5のレベルの尺度とそれぞれのレベルに対応するパフォーマンス（達成度・完成作品等）の特徴を文章表現で示している評価基準である。

パフォーマンス評価は、A判定（十分達成）、B判定（おおむね達成）、C判定（Bに達

していない) の3段階で判定する。

なお、気付く(問題設定)段階の評価は、学習問題を把握し、選択する指導に重点を置くので、次時の指導に生かす評価とする。

① 単元の評価

単元における表現活動の中で、社会的事象の思考・判断・表現の到達度を判定するためにパフォーマンス評価を行う。パフォーマンス評価のルーブリックは、単元で学習した社会的事象の用語を活用して比較、関連付け、総合して文章表現し、その到達度の段階で判定できるように作成した。ここでのパフォーマンス評価は、ワークシートの記述内容からA判定(十分達成)、B判定(おおむね達成)、C判定(Bに達していない)の3段階で判定する。

② 単元の定着度の評価

単元終了後の1～2か月後に思考力・判断力・表現力の定着度を測定するテストを実施する。これは、単元終了後すぐのテストの評価では、記憶力に頼る「知識・理解」の評価になりがちになるため、それを避け、真の思考力・判断力・表現力が定着しているかを測定、評価するもので、本研究では、「総括的評価」と呼ぶ。方法は、「単元の評価」と同じパフォーマンス評価法とする。

また、パフォーマンス評価法が思考力・判断力・表現力を的確に測定する総括的評価として有効であるか検証する。そのため、「単元の評価」と「単元の定着度の評価」の測定結果を比較し、異同の分析をして検証をする。

9 結果と考察

(1) 問題解決的な学習の実践による効果

ア 4段階の学習過程の設定と思考活動・表現活動の位置付け

① 気付く（問題設定）段階

子どもたちが、社会的事象について「なぜ」「どのように」「何のために」などという疑問や問題に気付くことができるような導入を考えた。そして、子どもの既存の知識や体験とギャップのあるような資料を提示し、主体的な思考活動に向かうようにした。

3年生では、買い物調べの結果をまとめたグラフから「なぜ」を導き出させた。「近いBの店よりもなぜAの店にたくさんのお客が来るのか」という子どもたちの疑問を学習問題に設定した。学習問題に対して「たくさんの品物があるから」「安いから」などの予想が出て、追究への意欲が見られた。

5年生では、今と昔の自動車を比較した写真、最高速度や生産台数の変化のグラフから子どもたちは、自動車生産の進歩を感じ取り、「どのように自動車がつくられているのだろう」という共通の学習問題を設定した。さらに、教師が与えた三つの視点「製造」「働く人」「新しい車」について、話し合っ具体的学習問題を設定し、その中から個々で調べたい問題を決めた。

6年生では、江戸時代の寺子屋と明治時代の学校の様子を絵図で比較しながら、30年で大きな変容があったことを知らせ、30年の間に「明治政府はどんな国づくりを目指したのか」という学習問題を設定した。さらに、教師が与えた四つの具体的な問題の中から一問題を個々が選択し、設定した。

事象への気付きを促す資料の提示は、3・5年生では、子どもの追究意欲を喚起し、各自の学習問題につながったことが、図13の事後の満足度からも分かる。「自分たちで知りたいことを調べることができるから勉強が楽しい」という肯定的な意見も聞かれた。

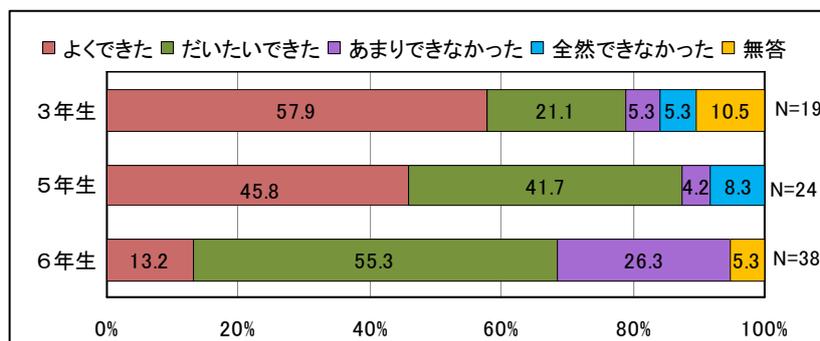
しかし、6年生では、学習問題の設定について「あまりできなかった」と回答する子どもも多い。これは、江戸末期から明治初期にかけて急激に変化する生活、文化、政治などの様々な分野において資料

を提示することによって解消されるのではないかと考える。歴史学習であるので、単元が見通せるような資料や具体的なイメージを広げるような資料の提示により、学習していく明治時代の概要をつかみ、「なぜこのような変容が起こったのか」を知りたい、調べたいと願いをもつであろうと考える。

② 調べるI（問題追究）段階

3年生は、問題を追究するために、計画、見学、まとめ、発表について一斉学習を中心に行った。1回目の店の見学は、教師が思考を促す二つの視点「店の様子」「働く人の様子」を示して体験的な学習を通して解決していった。

図13 事後の満足度「学習問題を設定できたか」



5年生は、自分で設定した具体的問題について、工場の見学、教科書や資料集、自動車会社のガイドブックで調べて付箋紙に短い文で書き表した。

6年生は、個別学習で教科書や資料集、インターネット、図書資料などで情報収集を行い、取捨選択して整理をしたり、矢印を使ったりしてまとめた。

③ 調べるⅡ（問題追究）段階（交流）

この段階では、主に調べたことを比較したり、分類したり、関連付けたりしてまとめ、交流活動を行った。

3年生では、与えられた視点「店の工夫」に沿って2回目の見学を行って、調べたことを分類しながらまとめて全員で発表し合った。

5年生では、各自が調べて分かったことを書いた付箋紙をグループ内で比較、分類、関連付ける思考活動を行った。また、この活動では、短い言葉に概念化して表題を付ける表現活動も取り入れた。友達の調べた内容を比較、分類、関連付けを行うことは、思考を操作しながら、視覚的にも事象についての理解につながった。そして、全体交流では、表題を基に伝え合い、新しく知ったことや疑問を次の学習に発展させた。

6年生では、個々で調べた内容をグループ内の友達に分かりやすく説明する表現活動を行った。この活動は、話し手が調べた内容をきちんと理解していないと聞き手に伝わらないので、話し手にとって十分な理解力と表現力が要求された。また、聞き手にとっても、聞き取ってメモする力や聞き返したり、質問したりするコミュニケーション力が必要となった。さらに、「政府」と「国民」という双方向の立場から事象について、根拠を基に考えを発表し合った。

事後の意識調査から、調べるⅠ・Ⅱ（問題追究）段階の学習の満足度を見ると、高学年では、調査やまとめの思考活動がしっかりできると言える（図14）。また、調査やまとめの思考活動がしっかりできていれば、考えを交流する表現活動も満足のものになっていることが分かる（図15）。

3年生では、調べ方のスキルを習得させる必要があることが分かる。細かく視点を与えて調査やまとめをすることが大切である。学習に使用するワークシートも観察や調査の項目を学習の視点として詳細に示すことで思考活動を支援することができると思う。したがって、例えば、見学ワークシートでは、図16のようなヒントの多いシートに変更すると効果的である。

また、図15の表現活動では、否定的な回答もやや多

図14 事後の思考活動の満足度「調べること・まとめることができたか」

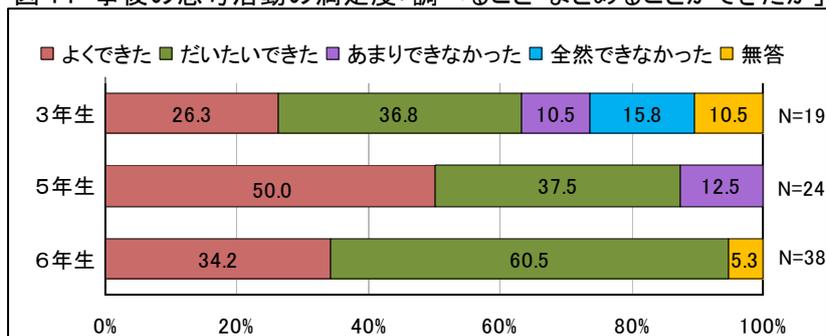
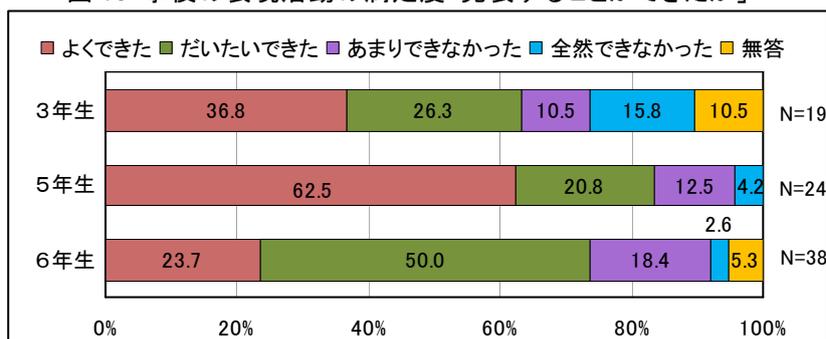


図15 事後の表現活動の満足度「発表することができたか」



く見られる。調べたことやまとめたことをうまく発表するために、話合いのスキルやコミュニケーションのスキルを習得させることも必要である。学び合いのための話型の提示などにより、考え方や表現の指導をさらに工夫したい。

図 16 ヒントの多いワークシート(3年の実践で使用したシートの改良版)

Aスーパー 見学カード

見学の2 お店のくふうを見つけよう!

3年 組 名前

見学の計画を立てよう! ～何をみてみようかな?～

① _____

② _____

③ _____

はたらく人の様子

【売り場】

【レジの係】

【そのほか】(放送する人・ちゅう車場の係)

店の様子

【ならべ方】

【ねふだ】

【明るさ】

【カート・かご】

【リサイクルボックス】

【そのほか】

④ まとめる（問題解決）段階

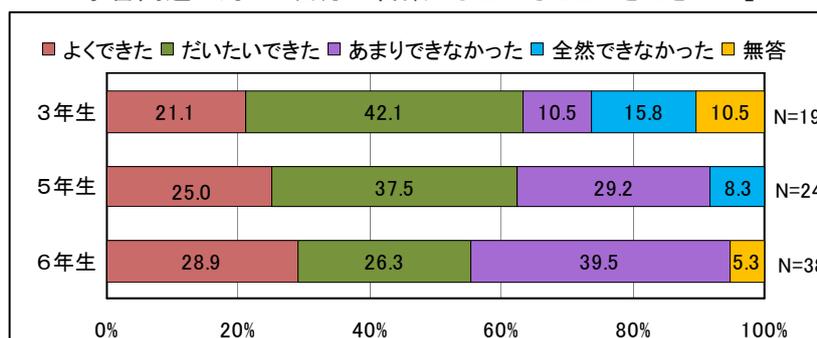
学習問題に答える形で社会的事象に対する概念化をするために、今までの学習の中での自分の考えを再構成させ、文章表現をしてまとめるという表現活動を行った。「つまり（だから）、・・・は、・・・である」という短い文章に概念化をしたり、自分の考えを再構成させてまとめ直したりすることを狙った表現活動である。

3年生では、単元を通して学習した「なぜAの店にたくさんのお客が来るのか」に対し、自分の言葉でまとめ、発表し合って確認をした。

5年生では、単元を通して学習した「自動車はどのようにつくられるのか」に対し、学習したことを基にこれからの自動車について、自分の言葉でまとめ、最後に生活との関わりにも触れて論述した。

6年生では、単元を通して学習した「明治政府はどんな国づくりを目指したの

図 17 事後の問題解決に対する満足度
「学習問題に対して自分の言葉でまとめることができたか」



か」に対し、自分の考えを政府の立場か国民の立場で発表し、最後に文章表現を行った。

図 17 は、まとめの段階において、学習問題に対して自分の言葉でまとめ直すことができたかどうかについての子どもの満足度である。満足度はやや低く、学習問題に対して考えを再構成させた文章表現をうまくできなかつたと感じている子どもがどの学年も 4 割程度いる。特に、学年が上がるにつれて「あまりできなかつた」と評価する子どもが増えているのは、学習内容の抽象度が増し、子どもが思考を言語化することに自信をもてないことが原因であると考えられる。

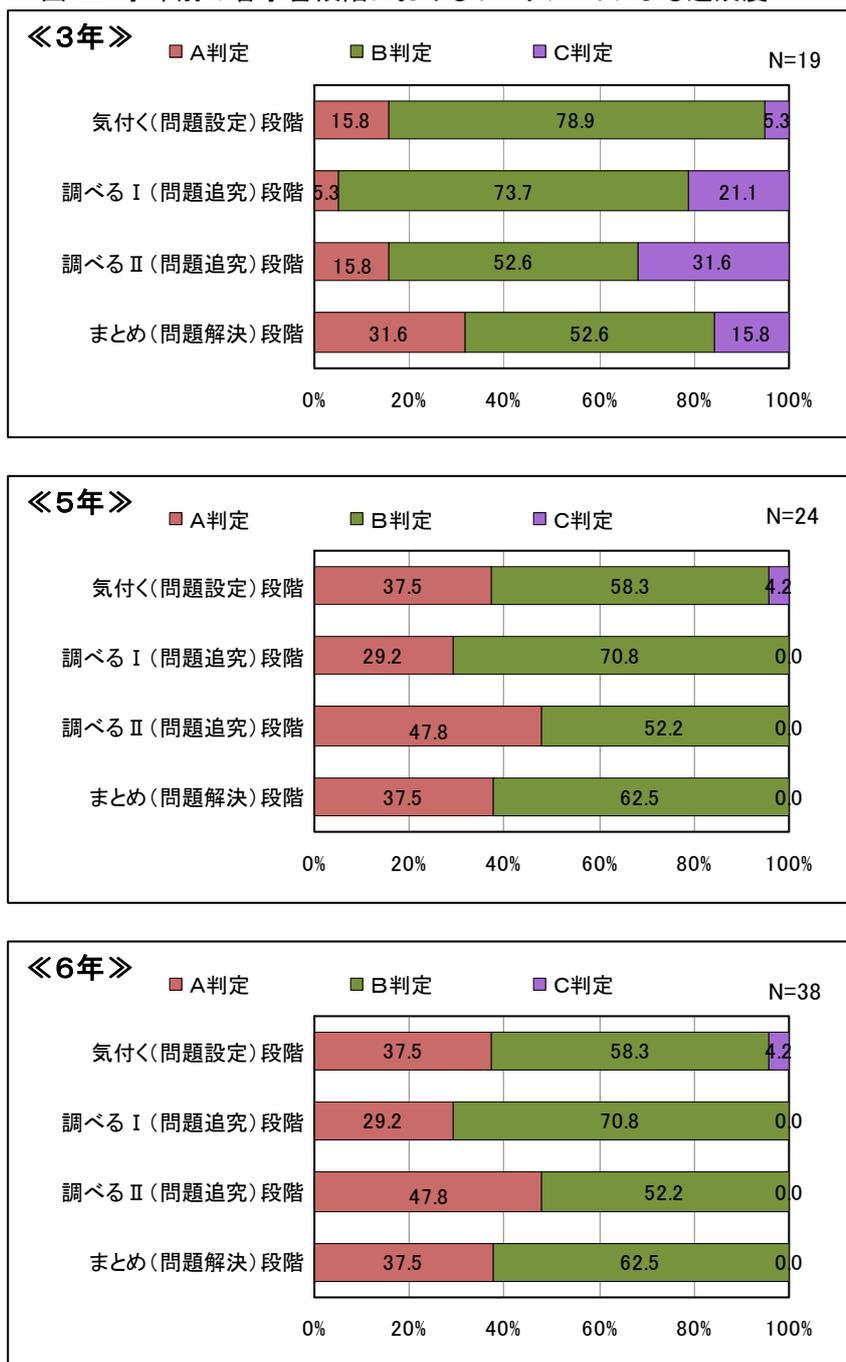
一方、各学習段階のワークシートの記述内容について、各学年の実践における「単元計画と評価計画」に合わせて評価をし、達成度を表したものが、図 18 である。

段階ごとの達成度を見ると、調べる（問題追究）段階が A 判定（十分達成）又は B 判定（おおむね達成）していれば、まとめ（問題解決）の段階における観点別評価「思考・判断・表現」も、ほぼ B 判定（おおむね達成）以上であり、学習目標を達成している。

したがって、調べる（問題追究）段階が充実できているかどうかは、まとめ（問題解決）の段階での学習問題に対する答えを概念化してまとめることに大きく影響することが分かる。

まとめ（問題解決）の段階における図 18 の達成度と図 17 の満足度を比較すると、子どもの満足度がやや低いのは、子どもは言語による表現への自信のなさや調べる（問題追究）段階における知識の習得不足などの不安を感じていることが考えられる。単元で押さえておきたい基礎・基本を明確に

図 18 学年別の各学習段階におけるワークシートによる達成度



して実践に臨み、子どもが確実にその基礎・基本を身に付けられるようにしていく必要がある。

イ 学習形態の工夫

図 19 問題解決的な学習における学習形態の基本例

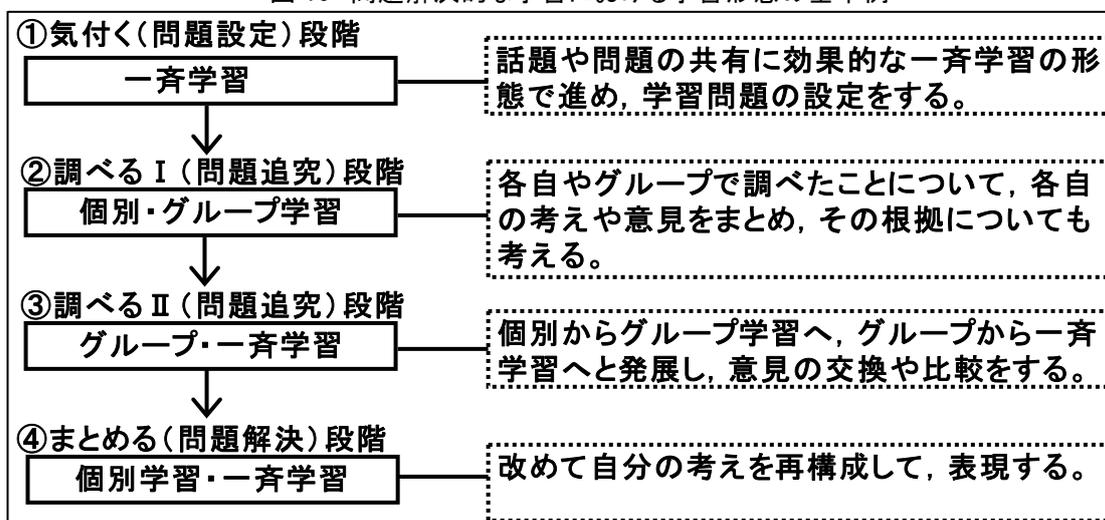


図 20 各学年が取り入れた単元における学習形態

学年	単元における学習形態
3年生	一斉(問題設定)→個別(調査)→一斉(交流)→個別(まとめ)
5年生	一斉(問題設定)→個別(調査)→グループ(交流)→一斉(交流)→個別(まとめ)
6年生	一斉(問題設定)→個別(調査)→グループ(交流)→別グループ(交流)→一斉(交流)→個別(まとめ)

単元の学習において、学習問題の設定から解決までの学習形態を、図 19 を基本形として図 20 のように、一斉学習、個別学習、グループ学習を組み合わせた学習を進めてきた。問題追究の中で調べたことから自分の考えをもち、グループで話し合って友達の影響から学び、よりよい考えを見いだすための集団思考を試みた。

3年生では、一斉で買い物調べから学習問題「なぜスーパーマーケットには、たくさんのお客が来るのか」を設定した。この問題に対して、みんなで予想を立て、1回目「店の様子」の見学、2回目「店の工夫」の見学を通して、各自で分かったことをまとめ、一斉学習による交流で、店のたくさんの工夫やそのわけを考えた。そして、最後に、学習問題の答えとして、児童Aは、「スーパーマーケットのお客さんがたくさん来るのは、お客さんのための工夫がたくさんあるから。スーパーマーケットは、暮らしになくてはならないものだった」とまとめた。

5年生では、一斉で共通学習問題「自動車はどのようにつくられるのか」を設定した。この問題に対して、各自で予想を立て、さらに三つの視点「製造」「働く人」「新しい車」から具体的学習問題を設定した。児童Bは、「製造」部品の数、「働く人」働く人の年齢層と人数、「新しい車」どんな自動車をつくらうとしているのかを見学、インターネット、図書資料などで調べ、分かったことを共通点と相違点を明確にしながらグループで交流をした。その後、全体でも交流して疑問はさらに調べ、学習してきたことを基に、環境を考えた燃料や部品を少なくして安価にするこれからの自動車を考えた。そして、最後に、共通

問題の答えとして、「自動車工業は、環境や消費者のことをよく考えて、暮らしに便利なものをつくっている」と概念化してまとめた。

6年生では、一斉で学習問題「明治政府はどのような国づくりを目指したか」を設定した。そして、教師が示した具体的問題「明治維新を進めた人の思い」「大久保利通らの目指した国づくり」「政府の改革に反対する人々」「大日本帝国憲法」から学び合いのグループ内で各自が選択し、問題別グループで集まって調べた。調べたことを元の学び合いグループに戻って伝え合った。その後、全体で明治政府の改革を確認した上で、政府派と国民派に分かれて改めて発表会をするためのグループ学習を行った。一斉の発表会で自分の考えを述べ合った後、まとめの段階で、自分の考えを再構成させ、児童Cは、「地租改正について考えると税金が増えて、国民にも大変な思いがあったと思います。しかし富国強兵というスローガンを決めて目指した政府があったからこそ、今の日本があると思います。だから、明治政府の改革はよかったです」と論述した。

このように、調べたことを基にした自分の考えや意見について、学年の発達段階に応じた他との交流により、各自の考えを再構成させる表現活動に向かわせることができた。

(2) 観点別評価「思考・判断・表現」におけるパフォーマンス評価

ア まとめる（問題解決）段階における単元の評価

まとめる段階では、学習問題に対して単元の中で学んだことから考えをもつ思考活動とそれらについての発表や話し合いによる表現活動によって、とらえ直した自分の考えを概念化する形で文章表現をさせた。ここでの文章表現は、単元における観点別評価「思考・判断・表現」として記録に残すことにした。そのため、判定基準とするルーブリックを作成し、パフォーマンス評価を行った。

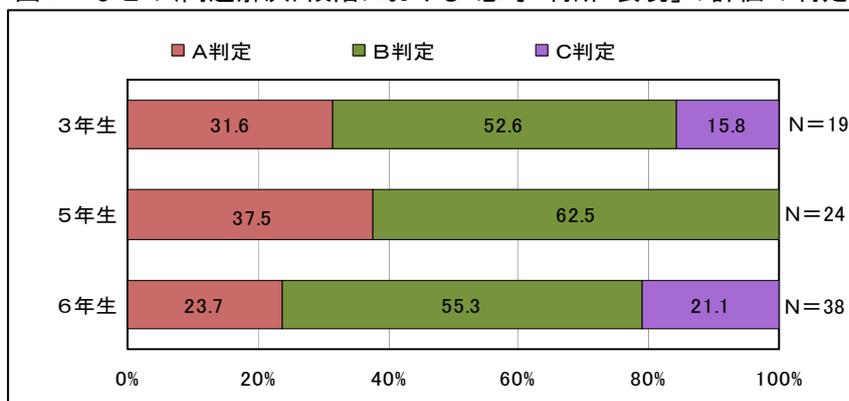
3年生では、「どうしてたくさんのお客がスーパーマーケットに来るのか」について、見学し、発表し合ったことから、自分の考えを文章表現した。

5年生では、「自動車はどのようにつくられているのか」について、調べた「製造」「働く人」「新しい車」を基に、これからの自動車を考え、自分たちの生活とどのように結び付いているのかを論述した。

6年生では、「明治政府はどんな国づくりを目指したのか」について、調べた内容を基に、政府と国民の立場で発表し合った上で、明治政府の政策に対する自分の考えを再構成させて論述した。

その結果は、図 21 の通りである。観点別評価「思考・判断・表現」は、3年生と6年生の80%がB判定（おおむね達成）以上、5年生においては、全員がB判定以上であった。

図 21 まとめ(問題解決)段階における「思考・判断・表現」の評価の判定



イ 単元の定着度の評価

各学年とも、学習終了後1～2か月後に総括的評価として、観点別評価「思考・判断・表現」を見取る定着テストを実施した。学習した事柄や用語を使って表現させるためのパフォーマンス課題を2問作成し、論述させた。予告なしのテスト形式で時間は20分間とした。使用させたい事柄や用語を提示せずに実施した。また、簡単に評価できるように事柄や用語の活用、関連付けた表現の数量で判定できるルーブリックを作成してパフォーマンス評価を行った。

その結果は、図22の通りである。

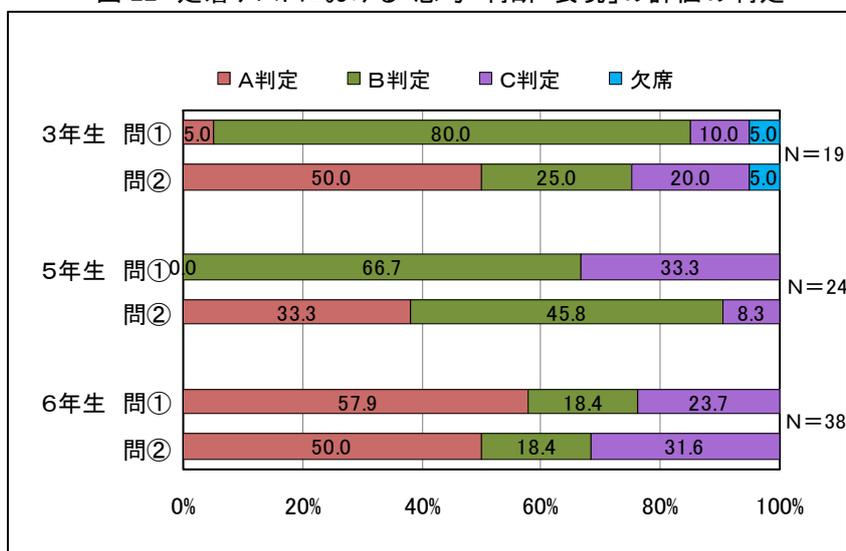
この結果から、観点別評価「思考・判断・表現」は、単元におけるまとめの段階での論述（単元の

評価）と学習終了後の予告なしの定着テストでは、3年生と6年生がほぼ同じ結果を得た。つまり、問題解決的な学習では、学習終了後しばらく期間が空いても、単元の学習で習得した事柄や用語を使い、それらを文章で関連付けたり、説明したりできる子どもが8割いる。それは、子どもが主体的に学習に臨んで得た思考力・判断力・表現力であるからだと考えられる。

このことから、単元終了後の1～2か月後の評価として、パフォーマンス評価法は、観点「思考・判断・表現」の評価として妥当性、信頼性の高い評価と言える。

しかし、5年生では、まとめ（問題解決）の段階の評価（P17の図21）の0%であったC判定が、定着テストの間①では約33%となり、設問やルーブリックの修正が必要であることが分かった。

図22 定着テストにおける「思考・判断・表現」の評価の判定



10 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

子どもは、問題解決的な学習に意欲的に取り組み、表面的な知識の習得ではなく、知識を比較、関連付け、総合して思考し、社会的概念を自分の言葉で表現することができた。

(2) 課題

思考力・判断力・表現力がまだ十分身に付いていない子どもの現状から、授業改善の工夫を更に行う必要がある。

以下の改善点を今後の課題として、次年度の研究を進めていきたい。

① 単元の学習に意欲がもてる学習問題の設定

既習の知識や体験とギャップのある導入の工夫をする必要がある。“なぜだろう”“調べたい”という意欲を喚起し、主体的に学習に向かわせたい。また、学習が見通せる問題の選択、把握など学年に合う設定の仕方を検討する。

② ワークシートの工夫

調べ方やまとめ方の学び方を指導するため、教師によるヒントの多いワークシートの作成をする必要がある。また、学び合い学習をうまく機能させるため、交流して新しく分かったことや考えを自分の言葉で記入できる学びの確認のためのワークシートの工夫をする必要がある。

③ ペアやグループによる学び合い学習と全体での交流

小集団でのコミュニケーションを図りながら、自分にはなかった考えを取り込み、考えを再構成させる表現力の育成を無理なく行うためのグルーピングや小集団での効果的な学習場面の設定を検討する。例えば、ペア学習においては、共通点を見だし、それらを関連付けさせるようにする。

全体では、問題追究で見いだした考えの共通点や相違点を比較、関連付け、総合して交流ができるようにさせる必要がある。

④ パフォーマンス評価についての検討

設問とループリックを見直し、修正する必要がある。また、記述しやすい解答用紙の作成もしたい。さらに、評価の判定基準を子どもに事前に示す方法を検討する。

⑤ 「単元で押さえておきたい基礎・基本」の明確化

単元の計画の段階には、調べること、理解させたい内容、育てたい態度、高めたい能力などを明確にし、指導していく必要がある。

⑥ 学年の発達段階を考慮した目標の設定

問題解決的な学習における4段階の各学習過程について、学年の発達段階に応じた目標を明確にして実践を行う。6年の歴史学習は、社会的事象の抽象度が増すため、5年生までの思考力や表現力よりも高度な力が要求されていることも考慮したい。

【参考文献】

- ・文部科学省『小学校学習指導要領』平成20年3月
- ・国立教育政策研究所『特定の課題に関する調査(社会)結果のポイント』2008.6
- ・ベネッセ教育研究開発センター『第4回学習基本調査国内調査・速報版』2006.12
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』東洋館出版社2008.8
- ・文部科学省委託調査『学習指導と学習評価に対する意識調査』平成21年8月
- ・北俊夫『平成20年改訂小学校教育課程講座社会』ぎょうせい2009.2
- ・波多野完治『ピアジェの発達心理学』国土社1974.6
- ・国立教育政策研究所『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』【小学校社会】教育出版 平成23年11月
- ・北尾倫彦『平成23年度版観点別学習状況の評価規準と判定基準小学校社会』図書文化2011.5
- ・田中耕治『パフォーマンス評価 思考力・判断力・表現力を育む授業づくり』ぎょうせい2011.7